



百万両の壺

1959. 9~10

上映映画解説

No. 59

百万両の壺 11巻

日活京都1935年

監督・構成……………山中 貞雄
脚本……………三村伸太郎
撮影……………安本 淳

— キャスト —

丹下左膳……………大河内伝次郎
お藤……………喜代 三
ちよび安……………宗 春太郎
柳生源三郎……………沢村国太郎
萩 乃……………花井 蘭子
与 吉……………山本礼三郎
茂 十……………高勢 実乗
当 八……………鳥羽陽之助
お 久……………深水 藤子
(1935年6月15日富士館等で封切)

百万両の壺

飯田心美

およそ時代劇映画を知る者で丹下左膳を知らぬ者はあるまい。戦前のファンならかならずやこの人物の跳梁にうつつをぬかした時代が一度はあったにちがいない。その凄まじい人気は戦後にも持ち越され新人のふんした丹下左膳がむかしとおなじ隻手隻眼、浪人然たるいでたちで映画やテレビに活躍している。この一事をもってしてもこの人物がまきちらす変態性格の魅力のほどがわかるのであるが、しかし戦前のファンに言わせると丹下左膳の真骨頂はやはり大河内伝次郎でなければ出ないという結論をくだす。「姓はタンゲ、名はシャジェン」とわめきながら片腕にダンビラをふり上げたポーズはどうしても大河内であればピッタリ来ないという。

これには私もまったく同感だが、さてその大河内の左膳も伊藤大輔、山中貞雄と二代にわたる演出指導の

あいだにはかなりの違いがあるように思われる。大体この丹下左膳なる人物の発生は当時大衆作家として人気随一といわれた林不忘の筆になる「大岡政談」のなかに登場したのがはじまりだが、映画の方では伊藤大輔が初代の生みの親となったのである。初見参は「大岡政談・鈴川瀬十郎の巻」であるが、その後一本立ちとなり作品題名も「丹下左膳」と名乗って主人公格におさまったのである。出生地は昭和五年から六年にかけての日活映画であった。

ところが昭和八年と九年に「丹下左膳」を作っていた伊藤大輔が事情あって日活退社となるやこの怪人物映画のバトンは山中貞雄にひきつがれた。そしてつくられたのがこの「百万両の壺」である。そのころ山中は嵐寛寿郎プロの新人監督として一作ごとに世間の注目をあつめていたが昭和八年、日活入社と共にその作家的器量も一段と大きくなった。伊藤大輔の仕事を継承したものではこれに先立って「薩摩飛脚」があり都合二回にわたってリレーしたわけである。

さてここに興味あることはそのリレーにおける山中貞雄の仕事ぶりだ。前回の「薩摩飛脚」ではストーリーの性質上から思いきった手段をとらなかったが、この「百万両の壺」になると彼はまったく独創的な扱い方を試みた。前篇で描かれた丹下左膳とは全然別趣な丹下左膳を生みだしたのだ。伊藤作品では主人公の性格は、どちらかという后感傷癖のつよいニヒリスト的色彩が濃かったが山中はことさらそれを拭い去り、短気で怒りばい根は好人物の男として扱った。ストーリーそのものも前篇にまったく関係のない筋立をとり、この短気男をめぐる江戸下町の話に変えている。これは悲滄美を好む伊藤、諧謔を好む山中の作家的個性の差違でもある。

元来、山中には人生をなぐる詩情でうたいあげる一面と風刺、諧謔に人生を喜劇化そうとする一面があり作品の色わけも大体そのいづれかに属していたが、ここではその後者が姿をみせたのである。とにかくそ

の行き方は先輩伊藤の前作もなく林不忘の原作も眼中にないかのごとくに徹底しており、そのため封切直後に林不忘から苦情が持ちこまれたほどである。「これは自分の原作にあらず」というのが不忘の言い分だった。言語同断の改変なりというわけであるが山中としてはあえてそれを覚悟のうえの大改作だったのである。

山中のねらいにはそれまで暗いニヒリズムのヴェールでつつまれていたこの主人公を明るい庶民精神で洗い流そうという意図があったにちがいない。主人公の非凡の性格を平凡化し、そのどぎつさを平明にしようという気持ちが動いていたにちがいない。それゆえにこそ身辺から殺気が立ちのぼっていた左膳は江戸下町のさかり場に店をひらく矢場の用心棒として紹介されるのである。矢場といえぼそのむかしのビリヤードかパチンコ屋みたいなところで客の中には相当の不良もいる。そういう手合に彼は目を光らせているが一方ではまたその矢場の女将、櫛巻きお藤の情人にもなっている。武士としては情けない末路だがこの人物の目前で百万両の壺事件が突発するのである。上は伊賀の城主柳生対馬守からその家臣たち、さらに江戸の司馬道場へ婿入りした舎弟源三郎、下は江戸町人のクズヤ当八、手先与八の面々。これに左膳もまきこまれて欲の皮のつっぱった人間達の醜さが滑稽にえがき出される。風刺というほどのしんらつさはなく全体は場当たり式に笑わせる茶番劇にちがいが、仔細にみると当時の時代劇にはあまり見られない新感覚が戯作者的な神経とまじり合っているのがよみとれる。昭和六年に処女作をとって僅か七年間、戦争にかりだされて夭折した山中のキリン見らしいひらめきがこの作にも発見されるのである。

脚本も山中とおなじ京都鳴滝組の一人、三村伸太郎。なお伊藤作品で活躍した伏見直江に代ってポールドール専属の喜代三が抜てきされているのは深水藤子の出場と共に懐旧の情をおこさせる。

(9月12日一ツ橋講堂及び9月16、20、23、27、30日10月4、7、11、14、18日当館において午後2時から上映)

国立近代美術館フィルム・ライブラリー